

夕顔と「口惜しの花の契」

藤河家 利 昭

はじめに

夕顔の花は、その姿や咲く場所、さらにはそのはかなさなどから見ても、夕顔にこそふさわしい花である。しかし、夕顔は、源氏に詠みかけた歌の中で、源氏を夕顔の花に喩えた。このことについては諸説が出されているところである。夕顔の巻は、源氏の視点に立つて夕顔を捉える場合が多い。この問題を夕顔の側に立つて考えてみるとどうなるであろうか。夕顔の心には、自らを「口惜^{注1}しの花の契」を持つ夕顔の花に喩えられることを拒む姿勢があったように思われる。夕顔の花に否定的に関わる面があることについて考えてみたい。

一、源氏を夕顔の花に喩えること

源氏と夕顔の關係は、ちよつとした歌の遣り取りから「ただはかなき一ふしに御心とまりて」夕顔 一・二二六^{注2}始まる。その歌の贈答は既に幾つかの問題点を孕むものであるが、同時にそのことが二人の關係、殊に夕顔の源氏に對する姿勢にも関わりを持つてくるように思われる。先ずこの贈答歌を検討してみる。

修法など、またまたはじむべきことなど、おきてのたまはせて、出でたまふとて、惟光に紙燭召して、ありつる扇御覽ずれば、もて馴らしたる移り香、いとしみ深うなつかしくて、をかしうすさみ書きたり。

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

そこはかとなく書きまぎらはしたるも、あてはかにゆゑづきたれば、いと思ひのほかにをかしうおはえたまふ。

(略)さらば、その宮仕人なり。したり顔にもの馴れて言へるかなと、めざましかるべき際にやあらんと、思せど、さして聞こえかかれる心の憎からず、過ぐしがたきぞ、例の、この方には重からぬ御心なめるかし。御畳紙に、いたうあらぬさまに書きかへたまひて、

寄りてこそそれかとも見めたそがれにほのぼの見つる花の夕顔

ありつる御隨身して遣はす。

(二二三―五)

この贈答歌中、特に夕顔の歌について従来から疑問が出されている。一つは、内気な性格の夕顔から未知の源氏に歌を詠みかけたことである。二つは、源氏のような高貴な人を夕顔の花に喩えたことである。

一つ目の、夕顔の側から歌を贈った問題については、話を始めるための「作者の無理、失策なのであらう」とし、また「女房の合作」とする説^{注3}、「花盗人」に贈った「挨拶のうた」とする説^{注4}、「頭中将ではないか、と推測して、あるいはそう願つて」とする説等^{注5}がある。外に「さし過たるやうなれとも折ふしのすくしかたくて出したる扇なるへ

し」とする説^{注6}もある。

二つ目の、源氏を夕顔の花に喩える問題については、夕顔が自らを花に喩えたとする説^{注7}がある。その場合も「白露の光」は源氏を指すのである。これは夕顔の花が身分の低い者の家に咲くことを理由としている。また「白露」は「頭中将を表象する」とする読み^{注8}もある。一方、源氏の歌でも、源氏自らが近付いて女に喩えられた夕顔の姿をよく見ようとする説^{注9}がある。

これらの説はそれぞれの矛盾点を解消しようとして出されたものであるが、その矛盾点自体に夕顔の物語の特質が隠されているのかも知れない。この贈答歌の前の、夕顔の花が歌に詠まれるに至った経緯を辿てみると、誰が夕顔の花にふさわしいかだけでは済まない問題があるように思われる。

その前に、この歌の贈答においては、両者が互いに筆跡を紛らわしたり、変えたりしている点が注意される。これはともに素姓を知られないようにするためであらう。源氏は、惟光が大式の乳母の家の宿守に聞いた、揚名介の家で、「妻なん若く事好みて、はらからなど宮仕人にて来通ふ」(二二四)という話を信じて、その宮仕人の仕業と見たのである。これは後の部分から、夕顔の宿の住人が隣家の宿守

にそのように見せかけていたと考えられる節がある。源氏も、この前の部分に、「誰とか知らむと、うちとけたまひて」(二〇九―一〇)とあることから考えられるように、全く別人を装ったのである。夕顔の歌では源氏と見当を付けられているにも拘らずである。このように素姓を隠すことで、互いに現在の自分の立場を離れる余地が生じると考えられる。そこに常識に反して、源氏が夕顔の花に喩えたり、逆に源氏が喩えられたりする可能性も生じるであろう。

源氏が夕顔の宿を知る場面を改めて検討してみる。

切懸だつ物に、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかけれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉ひらけたる。「をちかた人にも申す」と、ひとりごちたまふを、御隨身ついゐて、「かの白くさけるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲きはべりける」と申す。

げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、この面かの面あやしきうちよろほひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに這ひまつはれたるを、「口惜しの花の契や、一房折りてまゐれ」と、のたまへば、この押し上げたる門に入りて折る。

(二一〇)

白い夕顔の花について、「おのれひとり笑みの眉ひらけたる」^{注10}、「花の名は人めきて」、そして「口惜しの花の契」と、擬人的な表現がなされている。また源氏が口ずさんだ「うちわたす遠方人にも申すわれ そのそこに白く咲けるは何の花ぞも」(『古今集』卷十九 雜駢)には、花を女と見て求婚する意味もある^{注11}。上の引用文の前には、この家の簾越しに覗いている美しい額際の女達がたくさんいるのを、源氏は「いかなる者の集へるならむと、様変りて思さる」(二〇九)と興味を持ち、さらに「すこしさしのぞきたまへれば」(二一〇)と、探ろうとする姿勢も見せた。このようなことからこの家に住む女達とそこに咲く夕顔の花が自ずと重なってくるように思われる。

しかし、隨身が答えたように、夕顔の花は一人前の名を持ちながら、貧相な家の垣根に咲くという矛盾するものを併せ持っている。源氏も、小さい家が多くむさくるしい界限の、あちらこちらに不体裁に傾いて頼りなげな軒先などに纏わりついている花の運命を「口惜しの花の契」^{注12}と言っている。この場面は源氏が夕顔の花の咲く宿に住む女に関心をもつ契機となっているだけではないように考えられる。夕顔の花の持つ矛盾は、この家に住む女とも関わっているのではないかと思わせる。

この源氏と御随身の遣り取りをこの宿の女達はどう聞いたのであろうか。

白き扇のいたうこがしたるを、「これに置きて参らせよ、枝も情なげなめる花を」とて、取らせたれば、門あけて惟光朝臣出で来たるして奉らす。(二二一)

童女が白い扇に載せて花を差し出すように勧めていることからして、女達は遣り取りの内容を聞いていたことになる。枝も風情がない花であるとするのは、花の咲く所がみすばらしいことに加えてというのであろう。そうするとこの女達は、自分達の家に咲く花のそのような面を卑下しているのか、それとも源氏と同じ位置に立つて見下しているのか、そのいずれかということになる。

ここでもう一度、夕顔の歌の贈答について考えてみる。

「心あてに」の歌の夕顔の花は源氏を指している外はない。後文に「まだ見ぬ御さまなりけれど、いとしく思ひあてられたまへる御側目を見ずさでさしおどろかしけるを」(二二五)とあるように、源氏の横顔を夕顔の花に喩えたものである。そうであるとしても、夕顔の宿に咲く花を喩えるにはその家の女主人こそ似付かわしい。それをあえて源氏に喩えて歌を贈ったにはそうする理由があったと考えられる。それは、一つには源氏が「をちかた人に

もの申す」と、花の名を尋ねながらも、どういう女達なのかと関心を示したことにもよっているであろう。さらに「口惜しの花の契や、一房折りてまゐれ」と言うに及んでは、女の側もそれをそのまま見過ごせなかったのではなからうか。つまり、自分達がそのような「口惜しの花の契」の者であることになってしまいかねないからである。夕顔はこの住まいを源氏に恥ずかしがっていたことが、後に分かる。従つて、源氏を逆に夕顔の花に喩えることによつて、問いかけた相手の名をこそ質し、少なくとも意識の上では相手と同等の位置に立とうとしたと考えられる。こうして、互いに名を名乗らないということは、この夕顔の物語の重要なモチーフとして展開していくのである。^{注13} それに対して源氏も筆跡を変えた上で、相手が自分を夕顔の花に喩えたのにそのまま乗ったのである。

こうして二人の関係は、夕顔の花についてはその本来の立場が入れ替わった状態で始まることになる。この夕顔の歌の贈答は、後に某の院において源氏が初めて顔を見せる場面に対応している。

顔はなほ隠したまへれど、女のいとつらしと思へれば、げにかばかりにて隔てあらむも事のさまに違ひたりと思して、

「夕露に紐とく花は玉ほこのたよりに見えしえにこそありけれ

露の光やいかに」と、のたまへば、後目に見おこせて、光ありと見し夕顔の露はたそかれ時の空目なりけり

と、ほのかに言ふ。をかしと思しなす。げに、うちとけたまへるさま、世になく、所がらまいてゆゆしきまで見えたまふ。(二三五―六)

源氏の歌の「夕露に紐とく花」、言葉の「露の光」はいずれも源氏の顔とその美しさのことであり、先の夕顔の「心あてに」の歌を受けている。夕顔の歌の「光ありと見し夕顔の上露」も同様である。夕顔の花については二人は始めの立場を保持している。^{注14}ただ源氏は「夕顔」という言葉を使っていないが、夕顔はここでも使っている。そこにも夕顔の花に対するこだわりがあるように考えられる。

ここで歌以外の部分において、「夕顔」という言葉が使われている例を見ておきたい。

先ず夕顔の巻の中では、次の例がある。

人に知らせたまはぬままに、かの夕顔のしるべせし隨身ばかり、さては顔むげに知るまじき童ひとりばかりぞ、率ておはしける。(二三六)

この場合は夕顔の花のことである。

夕暮の静かなるに、空の気色いとあはれに、御前の前栽枯れがれに、虫の音も鳴きかれて、紅葉のやうやう色づくほど、絵に描きたるやうにおもしろきを見わたして、心より外にをかしき交らひかなと、かの夕顔の宿を思ひ出づるも恥づかし。(二六二)

これは夕顔の死後のことであるが、右近が二条院に比べて以前の住まいを恥ずかしく思っている。

かの夕顔の宿には、いづかたにと思ひまどへど、そのままにえ尋ね聞こえず。(二六七)

この「夕顔の宿」という言い方は固定していると見られる。しかし、これは、住まい自体を指していても、その女主人を指しているとはまでは考えにくい。

このように夕顔の巻においては、登場人物にしる語り手にしる夕顔自身を指した例はないのである。因みに帚木の巻で頭中将が語った女については、源氏の心中を叙して「なほかの頭中将の常夏疑はしく、語りし心ざまづ思ひ出でられたまへど」(二二九)とある。

夕顔の巻以外では次のようである。

思へどもなほあかざりし夕顔の露に後れし心地を、年月経れど思し忘れず、(末摘花 一・三三九)

年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔を、つゆ忘れたまはず、
(玉鬘 三・八二)

はかなく消えたまひにし夕顔の露の御ゆかりをなむ、
見たまへつけたりし
(同 三・一四)

容貌などは、かの昔の夕顔と劣らじや

(同 三・一五)

これらは源氏や右近が亡くなった夕顔のことを指して言つたものである。このように登場人物を指して言う例は夕顔死後のことである。しかも「夕顔」と直接言っているのは源氏のみであり、語り手や右近は「夕顔の露」と言っている。このことは夕顔の花についての源氏と夕顔の意識の違いを示していると考えられる。

一、源氏が見た夕顔の宿

この夕顔の宿は、源氏の目にはどのように映っていたのであらうか。

源氏が初めてこの住まいを見た時の印象は次のようである。

門は蔀のやうなる押し上げたる、見入れのほどなくも
のはかなき住まひを、あはれに、いづこかさしてと思
ほしなせば、玉の台も同じことなり。
(二二〇)

源氏はこのささやかな住まいを、「世の中はいづれかさしてわがならむ行きとまるをぞ宿とさだむる」(『古今集』卷十八、雑下)の歌のように、どこに住むかはその人の運命であり、はかない世の中にあつて仮の宿りである点は玉楼と変わりがないとしている。あえて住まいについてこだわる姿勢は見られない。源氏の意識にこのような住まいのことを上せるためには、この歌のような概念を借りてくる必要があつたということであらう。

夕顔の歌の贈答があつた後、目当ての六条辺りの女性の所を訪れた時のことである。

御心ざしの所には、木立前栽など、なべての所に似ず、
いとのかに心にくく住みなしたまへり。うちとけぬ
御ありさまなどの、気色ことなるに、ありつる垣根思
ほし出でらるべくもあらずかし。
(二二六)

これは六条辺りの女性の邸と対比した場合であるが、普段源氏が相手にするような女性の所では、夕顔の住まいはその意識にも上つて来ないような所であつた。

また数日して惟光の報告を聞いた時の源氏の心中は次のようである。

かの下が下と人の思ひ捨てし住まひなれど、その中にも、思ひのほかに口惜しからぬを見つけたらばと、め

づらしく思ほすなりけり。

(二二八)

源氏は、住まいの様子から、雨夜の品定めで頭中将が語った、女の三階級の中の「下のきざみといふ際になれば、ことに耳立たずかし」(二三四)という下の品と見ていた。

さらに夏から秋になつて、惟光から詳しい報告を聞き、頭中将が語った女のことかも知れないと思つた場面にもこのようにある。

かりにても、宿れる住まひのほどを思ふに、これこそかの人の定め侮りし下の品ならめ、その中に思ひの外にをかしき事もあらはなど、思すなりけり。(二三五)

惟光が伝えた、隣のことを知っている者の話として、家中の者にも知らせないようにしているとあるが(二二七)、自らの報告の中に「人にいみじく隠れ忍ぶる気色になむ見えはべるを」(二三三)、「また人なきさまを強ひて作りはべり」(二三五)とあるように、極度にこの家の主人が誰であるかを人に知られるのを用心している。そのことから源氏は仮初めの住まいかとも思っている(後に通うようになつてからも「かりそめの隠れ処とはた見ゆめれば」(二二八)とある)。しかし、ここでははっきりと下の品の女と思つている。

そして、八月十五夜の明け方、源氏が夕顔を某の院に連

れ出して歌の贈答をする場面である。

「まだかやうなる事をならはざりつるを、心づくしなることにもありけるかな。

いにしへもかくやは人のまどひけんわがまだ知らぬしののめの道

ならひたまへりや」と、のたまふ。女恥ぢらひて、

山の端の心もしらでゆく月はうはのそらにて影や絶えなむ

心細く」とて、もの恐ろしうすごげに思ひたれば、かのさし集ひたる住まひのならひならんと、をかしく思す。

(二三三―四)

源氏がまだ経験したことのない、女との夜明けの道行きに陶然としているのに対して、女は身の行く末に不安を訴え、恐れと気味悪さを感じている。源氏は、夕顔の恐れを人がたくさんいた住まいに慣れているせいであらうと考えている。夕顔の恐れに無頓着な源氏の姿が窺われるのであるが、夕顔をそのような宿の住人と決めてそれで済ませているところがある。源氏は終始、夕顔の宿に住む夕顔を仮の住まいかとも思うものの、そのような下の品の女と見ていた。それが結局は夕顔の心を知ることを妨げたとも考えられる。このような源氏の無理解が夕顔を物の怪に襲わせ、死に至

らしめたという事情^{注15}をみると、この夕顔の住まいはその運命を大きく左右するものだったと言ふことが出来る。

三、夕顔と夕顔の宿

夕顔自身はこの住まいのことをどう思っていたのであろうか。

八月十五夜の晩近く、夕顔の宿に源氏という時の夕顔の様子である。

いとあはれなるおのがじしの営みに、起き出でてそめき騒ぐもほどなきを、女いと恥づかしく思ひたり。艶だち気色ばまむ人は、消えも入りぬべき住まひのさまなめりかし。されど、のどかに、つらきもうきもかたはらいたきことも、思ひ入れたるさまならで、わがもてなしありさまは、いとあてはかに見めかしくて、またなくらうがはしき隣の用意なさを、いかなる事とも聞き知りたるさまならねば、なかなか恥ぢかかやかんよりは罪ゆるされてぞ見えける。(二二九―三〇)

夕顔についてその心情が直接描かれる数少ない部分の一つである。隣家の暮らしの様子が間近で聞こえるのを女は恥づかしく思っている。心の中には様々に辛いこと、いやなこと、きまり悪いことがあるようで、それは住まいのこと

に起因するものであろう。源氏の前ではそれを出さないようにし、またことさらに別の自分を見せようとして、上品で鷹揚に振舞っている。ここから夕顔がこのような庶民が住む所に対して、少なくとも意識の上では離れた位置に立つ人物であると思わせる。それに対して源氏は、相手のことを考えないわけではないが、恥づかしがつて顔を赤くするよりもましであると思つて、夕顔の心の中には氣付いていない。^{注16}八月十五夜の月の光に照らされたこの家の様子への源氏の感じ方は、「見ならひたまはぬ住まひのさまもめづらしきに」(二三九)と、好奇心を抱き、唐臼の音についても「いとあやしうめざましき音なひとのみ聞きたまふ」(三三〇)、また虫の声についても「さし当てたるやうに鳴き乱るるを、なかなかさまかへて思さるるも、御心ざしひとつの浅からぬに、よろづの罪ゆるさるるなめりかし」(三三一)というように、良いにつけ悪いにつけもっぱら源氏の側に立つ感想であり、相手の心の中に入っていくことはない。

この後、某の院において、源氏が隠していた顔を見せ、夕顔の名乗りを求めるところがある。

「尽きせず隔てたまへるつらさに、あらはさじと思ひつるものを。今だに名のりしたまへ。いとむくつけ

し」と、のたまへど、「海人の子なれば」とて、さすがにうちとけぬさま、いとあいだれたり。(二三六)

夕顔は「白浪のよするなぎさに世をすぐす海人の子なればやどもさだめず」(『和漢朗詠集』巻下、遊女^{注17})の歌によって名乗ろうとはしない。自分を住む宿を定めない者とするところに、今の宿を住まいとすることを認めたくない気持ちもあり、そこに逆に住まいに対するこだわりがあるとも言える。この点は「いづれかさして」の歌を思い浮かべた源氏の意識と対照的とも言えよう。源氏も夕顔の死後、右近に「まことに海人の子なりとも、さばかりに思ふを知らで隔てたまひしかばなむつらかりし」(二五七―八)と言つて、夕顔がこう言つたことを覚えてゐる。

ところで、常夏の女は、頭中将の途絶えが久しく、女の子もあつたので、「山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露」(帚木 一五八)の歌を贈ってくる。

この歌は「あな恋し今も見てしが山賤の垣ほに咲ける大和撫子」(『古今集』巻十四、恋四)によつてゐる。女は逆に自分の住まいを「山がつの垣ほ」と卑下しているが、この歌は我が子に父親の愛情を求める歌なので、こだわりはなかつたのであろう。この家に住む女の様子について、「例の、うらもなきものから、いとも思ひ顔にて、荒れたる

家の露しげきをながめて、虫の音に競へる気色、昔物語めきておぼえはべりし」(二五八)とあるように、荒れてはいるが、恐らく亡くなつた親の家において頭中将を通わせていたのであろう。「海人の子」と「山がつ」とは同類のようでもあるが、対照的でもあり、また家を定めないのと、ともかく定まつた家があるのとの違いは大きい。常夏の女の物語と夕顔の物語は、女の性格等の面で密接な関係を持ちながらも、この住まいの点では様相を異にしている。

夕顔の住まいについての心の中は、死後になつて初めて右近によつて明かされる。

それともいと思ひ苦しきに住みわびたまひて、山里に移ろひなんと思したりしを、今年よりは塞りける方にはべりければ、違ふとて、あやしき所にもものしたまひしを見あらはされたてまつりぬることと、思し嘆くめりし。

(二五九―六〇)

夕顔は亡くなつた両親の邸に頭中将を三年ほど通わせていたが、頭中将の北の方の家から脅迫めいたことを言つてきたのを恐れて、西の京にある乳母の家に身を潜めていた。五条の宿は、そこからまた山里に移ろうと思ひ、方違え所として住んでいたのである。その住まいについて、夕顔は「あやしき所」と言い、そこで源氏に見付けられてしまつ

たことを嘆いていたという。このことは源氏が初めて夕顔の家を見たところで、隨身が夕顔の花について、「花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲きはべりける」

（二二〇）と言つていたのを思い起こさせる。源氏はそれに對して「口惜しの花の契や」と言つたのであるから、それを聞いた女の側がそのままに受け入れることには抵抗があつたものと考えられる。そのために夕顔の花を差し出す時に、わざと源氏を夕顔の花に喩え、自分の立場を晦まして歌を詠みかけたのであつた。

四、「口惜しの花の契」

以上、夕顔は夕顔の花の「口惜しの花の契」、即ち自分が身分の低い者の家に住む身の上であることを認めたくなかつたのではないかということを述べてきた。これは夕顔の花に否定的に関わっている一面である。しかし、このことがこの夕顔の物語において、最も本質的な夕顔と夕顔の花の關係なのではなからうか。これは言わば他者の自分に対する規定を認めまいとする態度である。このような態度は現在の実際の自分とは異なるもう一つの自分を装うことになる。このことは今井源衛氏が夕顔の性格について次のように述べられていることと関わってくるのであろう。

なるほど、外から見れば、一見彼女はナイーブにも無心にも見えただけども、その心の奥には、三位中将の遺児という誇りの為であろうか、その理由はともかくも、一人の女の意気地、あるいはしたたかな心の張りがあったということにもなるう。^{注18}

夕顔は、親の三位中将が「いとらうたきものに思ひきこえたまへりしかど」（二五九）と慈しんでいた時の夢を忘れられないのであろうか。親もなくその家を離れていても、以前と同じような氣位を持ち続けている、また不本意な身の上にあつてむしろそのような姿勢を強めていると言えるかも知れない。

このように親がなく、その親がいた、よかつた時のことが忘れられない点では空蟬と似ている。しかし、源氏に対する態度は極めて対照的である。

心の中には、いとかく品定まりぬる身のおぼえならで、過ぎにし親の御けはひとまれる古里ながら、たまさかにも待ちつけたてまつらば、をかしうもやあらまし。

（略）とてもかくても、今は言ふかひなき宿世なりければ、無心に心づきなくてやみなむと、思ひはてたり。

（帚木 一・一八七）

空蟬は現在の受領の妻という世間の自分に対する規定をさ

れる前に、亡くなった親の名残を留める邸で源氏を迎えることが出来たら楽しかろうと思う。しかし、結局、空蟬はいくら源氏に惹かれても、現在の受領の妻という身分に収まった以上、情を解さない氣にくわない女として通そうとする。空蟬は「品定まりぬる身のおぼえ」を「言ふかひなき宿世」と受け止め、無理に自分をその中に押し込めたのである。

「口惜しの花の契」を認めまいとする意識は、源氏との関係の端緒となったが、源氏は夕顔を低い身分の女と見て素姓を明かさず、夕顔もそれに対抗して最後まで名乗りをすることはなかった、というように、二人の間に大きな齟齬を生じさせることになった。即ち、源氏が素姓を隠して通うのを、夕顔の側では「なほざりにこそ紛らはしたまふらめとなん、うきことに思したりし」(二五八)と、源氏のいい加減な気持ちの現われとして一人で辛いと思っていたのである。源氏はそれをつまらない意地の張り合いだったと思つてゐる(「あいなかりける心くらべどもかな」同)。夕顔のそのような物思ひは、辛いと思う気持ちを相手に知られることを恥ずかしがる、常夏の女の時以来の変わらぬ性質と相俟つて、夕顔の命を縮める大きな要因となった。夕顔は「口惜しの花の契」を受け入れまいとして、自ら萎

れたのである。

注1 夕顔の側に立つて夕顔の巻を見ることについては、黒須重彦氏著『夕顔という女(増補版)』(昭和六十二年四月笠間書院刊)で触れられている(二二六頁)。

注2 『源氏物語』本文の引用は、日本古典文学全集(小学館)により、冊数・頁数を示す。断らない場合は第一冊による。

注3 『源氏物語評釈』第一巻 三三九頁、四〇九頁。

注4 藤井貞和氏「三輪山神話式語りの方法そのほか——夕顔巻——」共立女子短期大学(文科)紀要第二十二号 昭和五十四年二月。

注5 注1の書、一七頁。

注6 『源氏物語古注集成 内閣文庫本細流抄』四一頁。

注7 『源氏物語古注集成 松永本花鳥餘情』四〇一頁。

注8 注1の書、一九頁。

注9 玉上琢彌氏著『源氏物語評釈』第一巻三五六頁。

注10 「白は、これ以外に、前出の白い伊予簾、後出の白い扇、女の白い衣服など、本巻の基調的色彩。清楚だが空しくはかない印象を与える」(日本古典文学全集 一・二二〇頁頭注)という指摘がある。

注11 日本古典文学全集 三七九頁脚注。以下、『古今集』の引用は同書による。

注12 この源氏の言葉について、「夕顔という女性の境涯・運

命などを象徴・予報していることばでもある」(注1の書、六七頁)という指摘がある。

注13 『古今集』の「うちわたす」の歌の返歌「春されば野辺にまづ咲く見れど飽かぬ花 弊なしにただ名告るべき花の名なれや」も、女が名を聞かれても容易には名乗りをしない歌である。また互いに名乗りを求め合う話としては『日本書紀』卷十四、雄略紀の「一事主神」の記事がある(拙著『源氏物語の源泉受容の方法』一一九頁 平成五年二月 勉誠社刊)。

注14 この場面については、「生まれは違っても、二人は同格の愛情の世界にいる」(『源氏物語評釈』第一卷 四〇八頁)という説明がある。

注15 今井源衛氏「夕顔の性格」(山中 裕編『平安時代の歴史と文学 文学編』所収 昭和五十六年十一月 吉川弘文館刊。後に『源氏物語の思念』所収 昭和六十二年九月 笠間書院刊)に、「夕顔の女の死は(略) また一つには、こうした凶兆に気附かず、のんきに構えて、某院に女を連れ込んだ源氏の責任だったとも云えそうところである」(一〇五頁)とある。

注16 日本古典文学全集 一三〇頁頭注に説明がある。

注17 日本古典文学大系による。

注18 注15の書、一〇八―九頁。